土浦発

未来への伝承 114

「古代の山寺・東城寺」

今年は、風土記編さんの詔（みことのり）が出されてから1300年にあたります。『常陸国風土記』が残る茨城県では、これを記念して各地で展覧会や様々なイベントが行なわれ、あらためて奈良時代やそれに続く平安時代にスポットが当てられた1年でした。

この時代を特徴づけるものの一つに、仏教を挙げることができます。風土記の編さんよりも少し前には、各郡を治める豪族によって、塔や金堂・講堂などを備えた本格的な寺院が建てられてゆきます。また、風土記編さんの命が下ってから28年後の天平13（741）年には、国分寺建立の詔が出され、国分寺と国分尼寺の造営が各国で始められます。そびえ立つ塔や美しい瓦で飾られた堂舎など、それまでの時代にはない壮麗な景観は、新しい時代の到来を感じさせるのに十分なものだったと思われます。

奈良時代後半から平安時代にかけて、仏教信仰はさらに広がりを見せ、新たなタイプの寺が登場します。その一つが山林寺院と称される山寺です。古くからある山岳信仰と相まって、古代の仏教には清浄な山で修行を行なうことを重視する山林修行の伝統があり、厳しい修行を通じて呪力が得られるとされていました。神の山として古くから信仰を集めてきた筑波山は山林修行にふさわしい山であり、周辺には寺が各所に建てられたことがわかっています。土浦市北部にある東城寺もそうした山寺のひとつです。

▲東城寺

東城寺は、延暦15（796）年に最仙（さいせん）によって開かれたと伝えられています。最仙は、常陸国内の寺院と僧尼を管轄する講師（こうじ）という職を務めた僧です。最澄の弟子とも伝えられ、天台教学を学んだ僧であったようです。東城寺のほかにも、市内の常福寺や行方市の西蓮寺、桜川市の薬王院なども最仙開基と伝えられています。

古代の東城寺は、現在の境内地の背後の山中にある堂平と呼ばれる地に建てられ、後に現在の地に移されました。創建当初の寺の規模などは不明ですが、古代の瓦が出土しています。写真の瓦は、屋根の軒先を飾る軒丸瓦になります。中心部から8枚の花弁が広がる意匠で、9世紀代のものと推測されます。また、国分寺に葺かれた瓦と同じ文様の軒丸瓦と軒平瓦も見つかっています。国分寺創建時のものではなく、9世紀前半に修理などに用いられた瓦と同じ文様です。伝えられる東城寺創建の年代に近く、山寺として創建されたことを裏付ける資料といえます。

現在の境内地から少し登ったところには、保安3（1122）年、天治元（1124）年の銘がある経筒などが見つかった東城寺経塚群（県指定史跡）もあります。筑波山周辺に築かれた山寺の多くはその後廃絶したところが多いなか、東城寺は1200年もの歳月を越え、今日まで法灯を伝える点でも特筆されます。春ともなれば緑美しい古刹・東城寺を訪ね、古代の息吹を感じてみてはいかがでしょうか。

▲軒丸瓦（東城寺跡出土）

今回紹介した東城寺跡出土の瓦は、3月中旬まで上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて展示しています。ぜひご覧ください。

問 上高津貝塚ふるさと歴史の広場（☎826・7111）